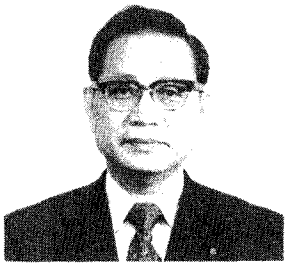
巻頭言

第5回国際熱分析会議を迎えて

日本熱測定学会 長
大阪大学理学部教授　関　集三



今より12年前，大阪市大の藤代教授のお力添えをもとに，東京教育大須藤教授，早稲田大大坪教授らのご賛同を得て，翌昭和40年，日本化学会春季年会において，熱測定討論会開催準備の有志懇談会が開かれました。その結果，大阪府大小野教授，東大向坊教授，東工試の益子博士，東大神戸教授らのご参加を得て，その秋，日本化学会主催の第1回熱測定討論会が大阪大学で開催されました。同年，スコットランドのアバディーン市で第1回国際熱分析会議が開かれ，わが国から上記須藤教授が出席され，その際設立されました国際熱分析連合（ICTA）の理事となられました。わが国の熱測定，温度測定および熱分析に関心をもった人々の集まりと期を一にしたわけであります。この年，アメリカでは既に第20回Calorimetry Conferenceが開かれており，ソ連では翌年第3回All-Union Calorimetry Conferenceが開かれることになっておりました。アメリカはこの方面でも20年の先輩でありました。

さて，第1回熱測定討論会は三学協会の共催で出発しましたが，その後次第に他の学問分野からの関心が集まりました。昭和45年，上記小野教授のご尽力で日本熱測定研究会が設立され，この討論会は同研究会の主催となり，会則の確立，ニューズレター発行，産業界からの維持会員参加のご援助がありました。不肖，私が委員長に選ばれて巻頭言をかきましたが，それはついこの間のように思います。この時の討論会の共催団体は12学協会に増えておりました。発表論文，会員数，論文内容等の向上，増大が着実に行われて参りました。

ご承知のように昭和48年，研究会の充実と国際交流の増加に呼応して研究会は学会に改組され，機関誌が発行されるようになりました。第2回討論会以来，毎年，世界各国から一流学者の招待講演者が招かれ，本年までにすでに19名に達し，それ以外にも外国学者の講演会も開催，本年には外国から一般講演参加の申込みがあり，外国人会員も存在していることは，このような小学会としてわが国では異例のことと申せましょう。創立当初より，上記ICTAおよびIUPACの熱力学・熱化学委員会等と情報を交換しつづけていることと併せ，国際レベルの交流が初まっていたわけであります。

さて，小生が再三にわたり，厚かましくも再び会長を引受けることになりました最も大きい理由は，須藤教授にひきつづいて理事になられ，さらに一昨年ICTA会長に就任された神戸教授のご熱心なご要請によるものであります。同教授は上記しました本学会の国際交流をさらに高めるため第5回国際熱分析会議をわが国に招致するため小生を説得されたことによります。ご承知のようにこの国際会議は第2回以来，ヨーロッパ2回，アメリカで1回開かれ，今回初めてアジア地域の日本で開かれることになりました。この意義は決して過少評価されてはならないでありましょう。私共，年配者よりもむしろ，第一線で活躍しておられる新進学者，企業で日夜，新製品，新技術の開発に努力しておられる現場研究者，である会員諸兄にとって，この機会を大いに活用していただきたいのであります。そこで各国人に交って自由に討論され，交換された知識，友情は必ず種子となって将来，根をふやし，幹に成長し，花を咲かすでありましょう。また外国人参加者に親しくわが国の研究の現状を見ていただくことは，大きくいえば国際文化交流や貿易の振興につながるものと存じます。

会議準備の進行状況について若干のべておきます。この会議開催のため一昨年暮から準備委員会が本学会の中に設けられ，昨年末，第1回組織委員会が発足し，準備委員会は，その下部組織としての実行委員会に拡充改組されました。本年1月に1st Circular，9月に2nd Circularが世界各国に発送され，10月には第2回組織委員会が開催され，いよいよ会議運営のための募金委員会も発足しております。その間，準備委員会6回，実行委員会が3回開かれ，また組織委員会の上部に顧問団が組織され，茅誠司，神田英蔵，斉藤平吉，宗宮尚行，田宮博の諸先生にご参加いただけましたことは光栄の至りであります。組織委員会，募金委員会には会員以外の諸先輩，産業界の有力な方々にご協力いただけたことも，会員諸兄と共に深く感謝いたしたいところであります。

次に会議の内容に簡単にふれますと，従来の過去4回

のテーマの骨子を踏襲しておりますが，特にわが国の本学会の特長を生かすよう若干変化を与えました。即ち，諸外国の熱測定学会ではすべて，カロリメトリー，サーモメトリー，および熱分析の研究者が別々の学会をつくっておりますが，わが国ではこれが有機的，相補的に統合されていますので，特に1つのセッションを増やしてあります。即ち，1）理論および装置，2）無機化合物，金属の熱分析，3）有機化合物，高分子の熱分析，4）地学における熱分析，5）応用科学における熱分析，の他に新たに6）熱量測定，反応および非反応系，を加えてあります。後援団体は本会議の学際的性格を反映して，日本学術会議，文部省の他17学協会の参加をいただくことができました。既に1st Circularの返答として20カ国より130名余りの参加申込みが来ております。国内の参加者が案外少く120名余りしかありませんので，奮って多数ご参加下さるよう願います。

最後に，本学会に話をもどしますが，前会長の武内先生が昨年の本欄で指摘しておられるように，学会の順調な発達は多くの方々のご努力と善意に支えられてはいるものの，財政的弱体のために今一段の内容の充実を果すためには一つの限界にきております。私共はこのためにも，上記の国際会議開催を契機として，本学会の地味ではあるが科学技術を支える基本的性格を自覚すると共に国内，国外のより広い層の認識と支援を得る絶好のチャンスとして本学会の一層の発展を期したいと存じます。何卒今一層のご支援をお願いする次第であります。